

旅の仲間

勝 井 慧

(2009 年度 M, 2012 年度 D)

私が関西学院大学に入学したのは、修士課程になってからである。生まれて初めて目にする批評用語や作家の名前をノートに書き写しまくって挑んだ大学院入試では、ひどく緊張していた。試験時期も後半であったから、きつと数人しか受けてないだろう、と思っていたところ、英文の 1 階にある階段教室には何十人もの学生がずらりと並んでいたの、やばい、これは落ちる……とさらに緊張した。(仏文や独文の学生もたくさんいたことを、当時の私は知らない)

手に鉛筆と汗をにぎり、私はわたわたと問題を解いた。その時、私のすぐ後ろの席に座っていたのが、修士課程で同期となる高木君と山下さんであったらしい。「すごい勢いで答え書いている人がいるなあ、って見たら、あれは勝井さんやった」と、後に高木君は言う。そんなに必死感を出していたなんて、少し反省である。

英文和訳問題に出た Wittgenstein のつづりが読めず、ずっと「ういっとげんすていん、って誰?!」と悩んでいた私も何とか無事に合格し、「歌わない平原綾香」こと山下さん(本当にそっくり)、常におしゃれと憎まれ口を欠かさない高木君(松山ケンイチ似という説もある)、スコーンと紅茶とイングランドをこよなく愛する福島さん、院生棟のパソコンをこっそり使い、いつの間にかネットゲームの勝者となっていた松井君と、5人の「旅の仲間」となった。そして魔法使いガンダルフ抜きのホビットの群れのように、私たちはおろおろしながらも指輪ならぬ修論をめぐる旅に踏み出したのだった。

大学院に入ると、すぐにカルチャーショックに打ちのめされた。学部のと

きには月に一度か二度巡って来るだけであった資料を用意しての発表が毎週、毎週迫って来るのである。米粒の半分程度の微細な文字で書き連ねられた *Scarlet Letter* や 1 ページにつき本文の二倍か三倍の脚注がついてくる *Paradise Lost* の授業は、果てのない山道、また山道であった。ウィキペディアの「ウ」の字を匂わせるなり、怒涛のダメ出し。図書館で資料を集めても引用文献の書き方がなっていると雨あられのダメ出し。いつの間にか Amazon で本を買い過ぎ雪崩を打つ引き落とし。

そんな日々の中、英文研究室で「旅の仲間」たちとお昼を食べながらあれこれおしゃべりをし、泣き言を言い、好きな本や映画の話をするのがなによりの息抜きであり、また刺激でもあった。正直に言うと、どうやって修論を書いたかは記憶の霧の中に隠れてしまい鮮明には思い出せないが、なぜか、みんなで材料を買い、門戸厄神にあった私の下宿で鍋パーティーや餃子パーティーをしたこと、庭とピアノが美しい山下さんの自宅の豪邸で福島さん直伝のスコーンを焼いたことなどは鮮明に覚えている。修論の執筆にはそれぞれが苦しんでいたように思うが、みんなで集まって美味しい物を食べ、研究とは関係のない話で盛り上がると、不思議とまた論文に取り組む気力が戻って来るのだった。

なんとか修論を書き上げる頃には、みんなはそれぞれ就職や結婚をし、「旅の仲間」はバラバラになった。博士課程には同期がおらず、なんだか本当に火の山まで指輪を一人で運ぶホビットになったようであった。幸い、私の周りには研究の道を示してくれる先輩や先生方が多くいたため、迷うことなく博士課程を終えることができたが、今でもやはり、あの「旅の仲間」たちと過ごした日々は、研究という旅の途中で得られた何よりの宝物であったと私は思う。